

令和元年6月13日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03480

研究課題名(和文) 戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究

研究課題名(英文) A Study of civil war era(SENGOKU-JIDAI) by Old Document, War chronicle, Battle-piece

研究代表者

堀 新(HORI, Shin)

共立女子大学・文芸学部・教授

研究者番号：80296524

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円

研究成果の概要(和文)：歴史学では二次史料とされて評価は低い軍記物語・合戦図屏風を、古文書・古記録といった一次史料と比較参照しながら読み解くことを目的として、歴史学・文学・美術史学の専門家による共同研究を行った。おもな検討対象は慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いと、慶長19～20年(1614-15)の大坂の陣である。

同時代史料や当事者の軍功覚書(後年のものも含む)、家譜などをもとに17世紀中頃に軍記物語が成立し、18世紀以降の軍記物語はそれを娯楽化して史実からは離れていく。合戦図屏風も17世紀中頃までに成立したものは史実の絵画化を意図したものであるが、18世紀以降に成立したものは娯楽化した軍記物語を描いた内容となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

軍記と合戦図屏風は社会的な関心は高いが、歴史学では二次史料とされて評価は低く、ほとんど研究蓄積がなかった。17世紀中頃までに成立した軍記・合戦図屏風は史実の再現を意図したものであり、人名や日時等の誤りや絵画化による虚構もあるが、時代の雰囲気を知る点では有用である。しかし、主に19世紀に成立した軍記物語と合戦図屏風は娯楽化したものであり、両者を混同した二次史料批判は改める必要がある。ただし、これらの史料も18世紀以降に戦国合戦がどのように認識されていたかを知るうえでは有用である。

研究成果の概要(英文)：War chronicles(SENGOKU GUNKI) and Figure of battle screens(SENGOKU KASSENZU BYOBU) are not reliable in History study. We are specialized in Japanese history, Japanese literature and Japanese art, and we weigh these material against historical documents. We studied around the battle on Sekigahara(1600), and the battle on Osaka castle(1614-1615).

War chronicles and figure of battle screens made in middle of 17 century are composed of documents (GUNKO OBOEGAKI) and pedigree(KAFU). These War chronicles and figure of battle screens are reliable historical documents. But war chronicles and figure of battle screens made in after 18 century are not reliable historical documents.

研究分野：日本史

キーワード：合戦図屏風 軍記物語 戦国合戦 関ヶ原合戦 大坂の陣

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1)かつて歴史学・文学・美術史学は、研究手法や問題関心の相違により、共同研究の試みは少なかった。しかし近年は、歴史学において非文字資料に対する関心が高まるとともに、文学作品を読み解くことは研究手法の一つとして確立している。しかし、戦国・織豊期(ここでは応仁・文明の乱～大坂冬・夏の陣とする)においては、軍記物語等は誤謬が多いとされ、ほとんど顧みられてこなかった。文学研究においても、小瀬甫庵の著作は別として、軍記の研究は全般的に低調である。

(2)こうした低い評価にも拘わらず、軍記は合戦の詳細を記した唯一の文献史料であるため、合戦じたいの具体的な推移は宮川忍斎「関ヶ原軍記大成」や『難波戦記』等に頼らざるを得ないのが現状である。かつては評価の低かった『甲陽軍艦』の史料的価値を再評価する向きもあるが、これに対する批判もあり、こうした軍記の評価方法が未確立の状況を打破する必要がある。

(3)絵画資料を歴史研究に用いることは、黒田日出男の一連の研究によって既に確立している。近年は洛中洛外図屏風をめぐる学際的研究が行われ、個別の合戦図屏風については、永禄4年(1561)の川中島合戦図屏風、天正3年(1575)の長篠合戦図屏風に関する研究がある。しかし、関ヶ原合戦図屏風や大坂冬の陣図屏風・大坂夏の陣図屏風についての検討は遅れており、学術的な研究がほとんどなされないまま、一般書では大きく取り上げられることが多く、やや無責任な状況であった。こうしたなかで、近年は個別の合戦を総合的に研究する試みがなされている。本研究の問題関心は、近年のこれらの研究成果の延長線上にある。

### 2. 研究の目的

(1)歴史学では二次史料とされて評価は低い軍記・合戦図屏風を、古文書・古記録といった一次史料と比較参照しながら読み解く。その際、軍記・合戦図屏風が描く内容を正確に読み取り、虚像と実像を区分して、相互の関係性を解明する。具体的には、軍記・合戦図屏風の記述・表現内容を、古文書・古記録で裏づけられる部分、裏づけはないが蓋然性が高い部分、全く誤謬の部分に3区分し、特に誤謬はどの先行作品を受け継いだのか、この作品の創作・捏造なのかを整理する。全ての記述や表現を検討することは物理的に不可能なので、対象箇所を10～20程度に絞って検討する。また、合戦図屏風は軍記の内容にもとづいて描かれていることが予想されるので、どの軍記を下敷きにしているかを併せて検証する。

(2) 軍記・合戦図屏風の記述や表現のうち事実に反する部分に着目して、それが意図的なのか、当時の歴史研究の限界による誤解なのか、それを選別する。そして伝来過程等の検証から作成主体と作成意図を解明する。これらを通じて、徳川史観によるバイアスを浮き彫りにする。

(3) 以上の(1)・(2)を通じて、戦国・織豊期の合戦や政治史のレベルを一段と上げ、さらには江戸時代以降の日本社会における徳川史観の影響力を検証する。

(4) また同時に、文学・絵画資料を歴史研究に利用する方法論を構築する。

### 3. 研究の方法

(1)本研究の方法における特色・独創的な点は、まず第一に歴史学・文学・美術史学の専門家が集まり、緊密な連携のもとに、同一素材を共同して検討することによって、単なる寄せ集めではない学際的研究を行うことにある。このことによって、関ヶ原合戦と大坂冬・夏の陣に関する研究精度を一段と高めることができるとともに、歴史研究における文学作品や絵画資料活用の方法論を構築することが期待される。これは歴史学だけでなく、文学研究・美術史研究においても、他分野の研究成果を援用するモデルパターンとなることが予想される。このことによって、各研究分野へ大きなインパクトをあたえることが期待されよう。

(2)そして第二に、軍記・合戦図屏風を網羅的に検討し、祖本や流布状況を把握することである。古文書・古記録も含めて、この基礎的データは、歴史学・文学・美術史学だけでなく、多くの研究分野に貢献するであろう。なお、古文書・古記録と合戦図屏風には重要文化財等もあり、原本の閲覧が難しい場合も予想される。そのさいは、フィルムやデジタル・データ等の閲覧や借用によって、原本調査に準じた検討を行う。

(3)歴史学・文学・美術史学それぞれの専門性を尊重しつつ、相互に乗り入れて分析と討議を深める。具体的には、関ヶ原の戦いと大坂冬・夏の陣に関する古文書・古記録を歴史学、軍記を文学、合戦図屏風を美術史学が、それぞれ基礎的検討作業を行う。そのうえで合同で原本調査を行い、協同して分析・討議する。古文書・古記録、軍記、合戦図屏風はいずれも可能な限り画像データを入手し、後日改めて再検討する機会を確保しておく。なお、収集した古文書・古記録を基礎史料とし、翻刻を作成・入力して、メンバー間の共有財産とする。

#### 4．研究成果

(1)17世紀中頃までに成立した戦国軍記は、一次史料である古文書・古記録や、当事者の軍功覚書や後世の覚書、近世前期に編纂された家譜、戦場図などをもとに成立した。当事者の証言とはいえ、経年による記憶違いや自らの武功を誇大に表現したり、史実の確定という点では一定の限界性はあるものの、この段階ではおおむね史実の追究に重点があり、一次史料である古文書・古記録からは窺い知れない戦国期の時代相等を浮かび上がらせることができる史料である。

(2)17世紀中頃までに成立した戦国合戦図屏風は、一次史料である古文書・古記録や、当事者の軍功覚書や後世の覚書、近世前期に編纂された家譜、戦場図などをもとに成立した。(1)に指摘した限界性のほか、絵師による絵画表現上の規定性(絵画化におけるパターン化など)もあり、描かれたないようをそのまま史実と認めるわけにはいかないが、一次史料である古文書・古記録からは窺い知れない戦国合戦の雰囲気や戦国時代の時代相を浮かび上がらせることができる資料である。描かれた人物の多くは特定人物を描いたものではないことも特徴である。ただし、合戦図屏風の制作背景などを記した関連史料が少なく、文献史料による検証が必要である。

(3)おおむね18世紀以降、戦国軍記が大量に生み出されるようになる。この時期の軍記物語は、史実の追究よりも娯楽化・物語化に重点があり、広く社会に流布して現代にもつながる戦国合戦のイメージを形成するが、歴史史料としての価値は低い。この(3)の印象から(1)も含めて戦国軍記を一概に史料価値が低いと決めつける傾向は是正する必要がある。ただし、近世中期以降の社会における戦国合戦のイメージを知るといえる意味では有用な史料である。

(4)おおむね18世紀後半から19世紀にかけて、戦国合戦図屏風が大量に生み出されるようになる。この時期の合戦図屏風は(3)の影響下にあり、(3)の内容を描くことが中心となる。描かれた人物には付箋等で人名が明記され、(3)で流布した名場面が描かれる。これは現代にもつながる戦国合戦のイメージを形成するが、歴史史料としての価値は低い。ただし、近世中期以降の社会における戦国合戦のイメージを知るといえる意味では有用な史料である。

(5)合戦図屏風の調査には困難を伴うことが多く、また繰り返し検証することができない。そこで高精細カメラでの撮影によって、後日の検討が可能となるほか、肉眼ではとらえきれない細部まで検証することが可能となる。また、画材や繊細な筆遣いなども検討することが可能となり、制作年代の確定にもつながる。以上のような理由で、高精細画像による検討の有効性を明らかにした。

#### 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

堀新、戦国合戦図屏風の基礎史料、共立女子大学文芸学部紀要、査読有、65 輯、2019、pp.87-103  
湯浅佳子、『関ヶ原始末記』とその周辺、かがみ、査読有、49 号、2019、pp.38-65  
井上泰至、軍記と屏風をつなぐもの、軍記と語り物、査読無、54 号、2018、pp.1-12  
堀新、三木合戦にみる古文書・軍記・合戦図の比較研究、軍記と語り物、査読無、54 号、2018、  
pp.13-23

山本聡美、近世合戦図の図像学、軍記と語り物、査読無、54 号、2018、pp.24-38  
金子拓、長篠の戦い後の織田信長と本願寺、白山史学、査読無、53 号、2017、pp.1-18  
黒田智、史料紹介「豊臣御数寄屋記録」、金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要、査読有、  
8 号、2016、pp.98-122、

〔学会発表〕(計 8 件)

金子拓、武功書上・家譜と『地域的軍記』の成立、東京大学史料編纂所国際研究集会「合戦  
のイメージから実像を考える」、2019

川合康、山内俊綱の「討死」をめぐる諸問題、東京大学史料編纂所国際研究集会「合戦のイ  
メージから実像を考える」、2019

湯浅佳子、関ヶ原合戦軍記本文の生成、東京大学史料編纂所国際研究集会「合戦のイメージ  
から実像を考える」、2019

湯浅佳子、関ヶ原合戦軍記の生成と展開、檀国大学・東京学芸大学国際学術大会、2018

黒田智、合戦図屏風の村落景観、シンポジウム「荘園調査と web 公開 備中国新見荘から美  
濃国大井荘へ」、2018

堀新、「唐入り」と合戦図、The War in Korea in 1592-98 and Research Materials、2017

井上泰至、関ヶ原説話の生成、日本近世文学学会、2017

山本聡美、病草紙における絵画様式の再検討、美術史学会、2016

〔図書〕(計 12 件)

堀新、共立女子大学、戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録による学際的研究、2019、237

井上泰至・湯浅佳子、勉誠出版、関ヶ原合戦を読む、2019、568

川合康、吉川弘文館、院政期武士社会と鎌倉幕府、2019、320

金子拓、勉誠出版、長篠合戦の史料学、2018、352

山本聡美、筑摩書房、闇の日本美術、2018、224

湯浅佳子、他、東京堂出版、仮名草子集成第 60 巻、2018、344

湯浅佳子、他、東京堂出版、仮名草子集成第 59 巻、2018、320

井上泰至、勉誠出版、関ヶ原はいかに語られたか、2017、213

黒田智、他、吉川弘文館、乱世の王権と美術戦略、2017、230

湯浅佳子、汲古書院、近世小説の研究、2017、656

堀新・井上泰至、笠間書院、秀吉の虚像と実像、2016、407

井上泰至、勉誠出版、近世日本の歴史叙述と対外意識、2016、497

〔その他〕

ホームページ等

<http://sengokugunkibyoubu.seesaa.net/>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：井上泰至  
ローマ字氏名：(INOUE,yasushi)  
所属研究機関名：防衛大学校  
部局名：人文社会科学群  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：90545790

研究分担者氏名：金子 拓  
ローマ字氏名：(KANEKO,hiraku)  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：史料編纂所  
職名：准教授  
研究者番号(8桁)：10302655

研究分担者氏名：川合 康  
ローマ字氏名：(KAWAI,yasushi)  
所属研究機関名：大阪大学  
部局名：文学研究科  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：40195037

研究分担者氏名：黒田 智  
ローマ字氏名：(KURODA,satoshi)  
所属研究機関名：金沢大学  
部局名：学校教育系  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：70468875

研究分担者氏名：佐島 顕子  
ローマ字氏名：(SAJIMA,akiko)  
所属研究機関名：福岡女学院大学  
部局名：人文学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：40225173

研究分担者氏名：山本 聡美  
ローマ字氏名：(YAMAMOTO,satomi)  
所属研究機関名：共立女子大学  
部局名：文芸学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：00366999

研究分担者氏名：山本 洋  
ローマ字氏名：(YAMAMOTO,hiroshi)  
所属研究機関名：金沢大学

部局名：国際機構

職名：准教授

研究者番号（8桁）：50583168

研究分担者氏名：山本 博文

ローマ字氏名：( YAMAMOTO,hirofumi )

所属研究機関名：東京大学

部局名：史料編纂所

職名：教授

研究者番号（8桁）：80158302

研究分担者氏名：湯浅 佳子

ローマ字氏名：( YUASA,yoshiko )

所属研究機関名：東京学芸大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：00282781

(2)研究協力者

研究協力者氏名：曾根 勇二

ローマ字氏名：( SONE,yuji )

研究協力者氏名：堀 智博

ローマ字氏名：( HORI,tomohiro )

研究協力者氏名：光成 準治

ローマ字氏名：( MITSUNARI,junji )

研究協力者氏名：米田 結華

ローマ字氏名：( YONEDA,yuika )

研究協力者氏名：米谷 均

ローマ字氏名：( YONETANI,hitoshi )

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。